



續本甲越軍記二編

十一



2258
23



遠 13
2258
卷 23



二編
續本甲越軍記二編卷之十一
卷第十
目錄
廿年

長尾景虎遠計維繫之事

諸將景虎之計と此に林泉寺小聚る圖

景虎入道謙信法將の二人變の取事

取
景虎入道謙信法將の二人變の取事

飯沼城合戦の圖

飯沼城陥落の事

飯沼城陥落の圖

續本甲越軍記二編卷之十一 目錄



新編

繪本甲越軍記二編卷之十一

長尾系虎遠計羅髮之事

天文廿一年景虎討小二十三家は多く思ふあかき累年の運札小田
 中の信將其意區々多く一旦我武威小廢とて涙なく米も実食
 屬まるとは其の甚なり今治ありとて是旗を揚る老あり討ち忍むを
 智るべしと云はれど故に屬はるか老多し其心更に測がれ法を
 の風俗皆日ト孫小當國にあかき信將等が祖と其余右大將頼朝の家
 人として累代歴くは士武と桓武の後胤二浦島山城の臨流清和堂
 の孫氏大に中原の末南家小家北藤原為憲長郷を後胤二階堂
 工藤の親系又と池大納言頼盛郷乃餘裔ありて年久しく者細小
 知らず元弘建武乃れ小新田左中將義貞の子小屬しわすひ



小室長光之傳

小室長光カト傳

其二

吉田輝正孫村上勢紙討事

半渡孫村上り退兵と擊つる圖

繪本甲越軍記二編卷之十一

甲

472

會本甲辰軍記二卷十一



諸將
景虎
追て
山
聚る



上杉憲顯以来我功とあり名姓をたし小揚一勇士等が好高
 なまば累祖の武名小徹り月家門と古より此不願と
 伐く登取上杉家は属とくく我家も亦属とくく是
 長尾信濃守頼景より父高来にむすまを四代の執権たりや
 換も也下小房村の士より其上我幼時より父は設遊と
 りれ昭田黒田今津が謀謀中犯れ印社英他も小吉しと文宇次更
 後河守と降せせ一幸世人よりあるなり今則武名を謀を以て
 法將増く我穂下は佐久の邊と取をせ其内公我を謀と穂下
 意公帰服の士甚稀なり二畧小田主内也月ドたのる畧一主居と
 月くさる討ちたふ中今口隣互に界を侵す討て若信守は
 んバ何を以てく得弘御宗人不若法將は起法文を書き世府内小

人質取入るは自ら我小徒のく無二の志は為ん控た計人と
 を得小法將の若幸と復て容易は考るく却て机を備へく
 の媒やさくし死物とて是と措く死を我下かよ房の諸將をく
 致す我家と寸塔も成をく一也持く小思と也むし一計を
 案し幸ひ長尾越前守の一族の懸くく玄妙塔の父る是は他の事
 致亦重し其人亦篤意ふく此頃真妻の魚をて見ちまはけ
 人せ謀を合うんや米津新去湯は客意成合は上田の城小遣
 たり勅書上田に到り越前守不對面し一系虎が密事を謀別
 一封の書と傳る其文は同系虎を刑定事云の命に於て七父を
 が遺跡を結編流しよま幸莫志の面目流る事と流るん也
 果多病ありて重任不耐と執思ふ其父不肖ありて不織

會本甲越軍記二編卷十一

三



景虎入道
謙信
諸君
伏々
不

然之曰赴日言一終卷十一

山に到ると思ひ定し一物と見く誠亦忠と仰ふ一族法將法士
 小中も中七各法良本甘けり君今後道有る時之誠後國上主將
 母く國中復れせん幸時を廻さるべ各威を著ひ推と奉り
 時之誠亦の運化時と得虚小亦して國中に礼入し北城を押
 願し竟其他の有せり人幸日法將と候べし推と見く各亦及
 以本骨折ありしと忽ら画解せりり清先祖一若し不孝と云ふ
 定帝公の所遠之と所肯ある幸不忠せりべし速し所府府あり
 て國家と活先ありる一某号実不位を信と互に競まよる公實ん
 やややく小凍あり系虎頭とあり某斯中て之と云し佛門小入る
 上を再ひ府内々向ふべき謂ありと敢て汗害の由さあり一族必
 元再三再四様をさるる色法使し傳る風信激公形と云はるる

系虎頭をさるる中流し愚かり某派新中て被其世中各々
 志ありしは是も姑くこれ系武門の影小生色府子たりと其
 けと存形定実公の命と信見信系と廢し嫡家と被續し誠亦法士の
 司く敢て國政を續とせり此實小亦以て國事小興か毎小公振と
 芳すり幸甚し我病ありしを治勉強と奉勢と仍し其勢復く
 才拙らぬがせん月と信意と交し強道とん被とれりも各忠凍の旨
 本所事今より公と中た先速し傳府し定実公の御命守り活亦の要
 以專勢とてしは云若遠有せり日廿六小の神祇の真符を系んせし紙
 の相と書と傳り誠亦改系一活とせり一族の人と信法士被宿小身
 中七各安法の信とせ演小公亦系虎とあり信士小對ひ某各の意志
 と然止りて身の不肖を顧と通世被許り止りて小亦を約をかり上り

甲斐 477

合戦の場



合戦の場
城の跡

合戦の場



非う疑ひ懸人あり有んや是名人の心と改さしめお共小永く社
 稷と保すらん為かむ六者疑屏さく人笑と出さるべしや有るは
 法乃景虎が大量と威をこども人笑と出さるや何有んと
 互ら面以見合満座は誠と唯有て言と出さるべし何有んと
 誠一守房景中条誠を孫資に成ぬんて云い作む社
 名と其先本知羽成書て毎二の志と致し何有んと笑と情
 命たは程らんや人の心か其一友も又一子二郎九と
 近く景虎ももつる道行一虎の法乃是又屋とれ集くても笑
 名もまんや各妻子と人笑くして府内の城も遠りさる
 景虎入に藤原が保畧して病も長尾誠を中条誠を
 中会免其其所へさ井ふもやう其家せんとい所と國さる

退き一ハ一統法と稱す一志の志は起法交と書て人
 笑と有ん謀るなり

敏原城陥落之事

同年五月神録集人信と皇弟小也世足利家へ官達受領
 の奉成頼る足利義輝公内裏小奏達有く長尾景虎と
 弾正少弼及任一後女佐下以給るる倫ら中下し足利家より
 官達の所祝せりて河内書並小備希國光の力をと揚る景
 虎大木及び有り肉重河内一振並小苗金堂給る代神と有
 足利家へ備前長光のき力一振引けの河馬一足養鷹馬一連
 青船と子足と進しりりそより系虎誠後國主と給り大さく
 小さく皆府内の下知りあるる中中も其部あるる島

甲 460

會本甲斐軍記二編卷十一



十



會本甲斐軍記二編卷十一

九

飯沼城
の図

因道大... 尾張... 古川... 肉... 人... 忠... 任... 府... 討... 必...

枚... と... 府... て... 備... が... 揚... 府... 上... 去... 討...

會本甲...

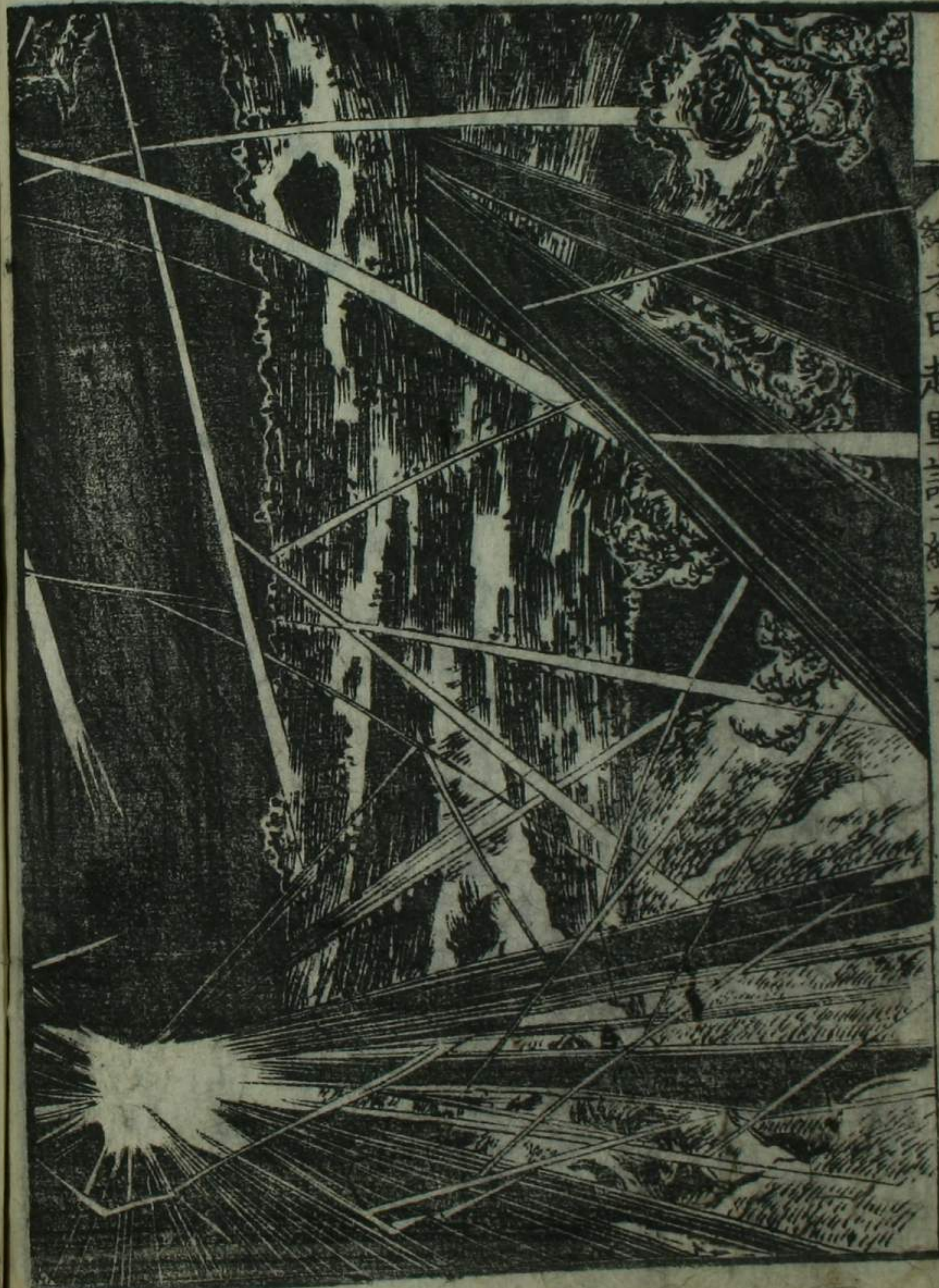
三十幕の傍より一がほを討死の後、後園に掃蕩し、
 してかく憐れ面見するもの多し、迷ひて云々、
 波まきまき、海軍の船色も遠のけぬ、
 うべき者も日々少く、海軍も多し、
 人知れば、うらや中と、
 ようして、
 剛の士、
 の柳より、
 して、
 と、
 送る、

初命、
 長尾、
 澤村、
 由城、
 佐藤、
 手、
 双、
 坊、
 恩、
 記、

小豆
長光
刀の傳

新編甲越軍記二編卷十一

十三



新編甲越軍記二編卷十一

敵

攻

の雄 直に其具の敵に...
 立て目之...
 一身の...
 石の...
 見之...
 古...
 何...
 不...
 と...
 華...
 て...

敵

田

城の...
 真...
 岡...
 山...
 大...
 周...
 村...
 有...
 中...

日本書紀卷之十一

其二



繪本日遊記卷二終

下

刀の鞘みくろくしりて中は為おれり河吉徳圃ありて下りた
 と通りが百姓の傍より其小豆と指ひ見たり城見たりにきく二つ
 小切り三河も石儀よそのは河吉徳圃ありて下りた
 おし小豆長光と名付りて所候とあるは世に傳へ長光とあり
 縁にきくけ方の半成は送せりしはよりけな城徳圃ありて縁
 せりてと縁候ふま候

け刀川中嶋合戦の時縁候此方よりきか打わりし是と二編の
 中嶋合戦の事下り記と後系脈が代々ありては系脈と
 指せりて其一年程経て其力の板も亦あり系脈大縁
 家老重江の傳書幸成城ありては家の家士氏も縁刀と
 又せ縁石取の水と縁候るはは目録も亦ありて縁

抄

且つ代えのおま竹俣の河吉け方と見ると是は似せりて
 とも重江より取へりて是より元の方を継中より二
 五歩とありて尾一節通り縁の元より是面より
 裏へ通りて元よりと申すは重江縁と河吉縁
 へては徳圃の人な傳りて徳圃長光の二尺守り二尺と
 の重方とありて小葉とて清水の南坂より指すかありて
 正長の長光より三河吉徳圃ありて是と傳りて幸の刀と聞
 けりて縁の縁も亦縁此刀は豊云(と申す)とあり

○二編より初編甲武軍記の所と聞け長尾重虎入る
 縁信が出生より縁後小平定天文二十一年子に記とあり

徳圃

其後見易かんのあきりいふ事あり記しるに
 清和れす秋武田信玄と合戦及乃よま氏記せん
 十一年より信長ゆつ村と武田と家の取合に記し
 初編十二卷月の信は信入がわたり見る人
 と石事なるは事なり秋。

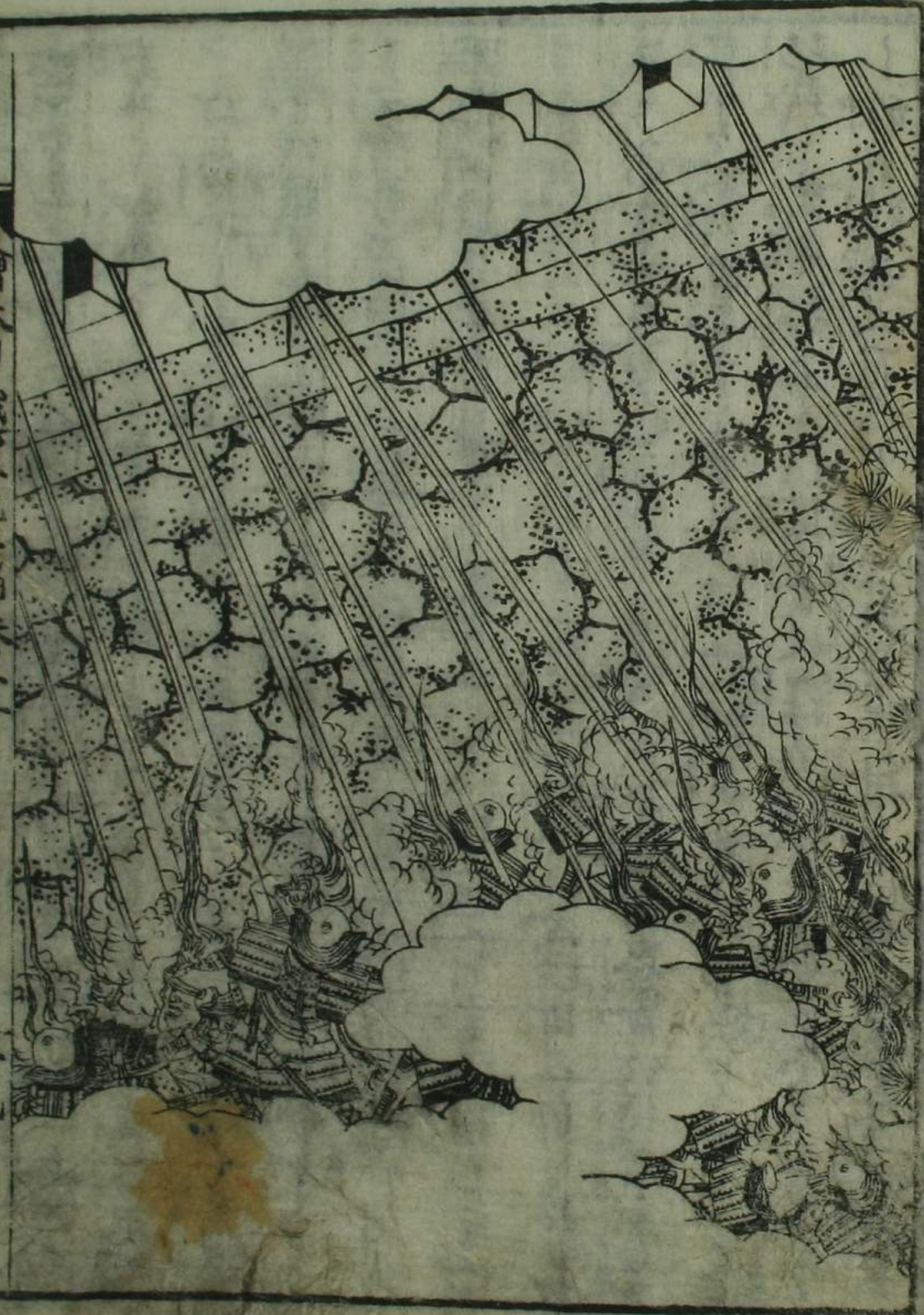
竹田 詩

吉田 正忠 信村と勢川村事

却信信長より甲死武田大膳を主暗儀と村となす
 武田正忠は信長に依りて武田大膳を主暗儀と村となす
 武田正忠は信長に依りて武田大膳を主暗儀と村となす
 武田正忠は信長に依りて武田大膳を主暗儀と村となす

沖恩とまの事 幸春ののこし生涯本報
 幸春は武田の忠臣として生涯を費したる者なり
 幸春は武田の忠臣として生涯を費したる者なり
 幸春は武田の忠臣として生涯を費したる者なり
 幸春は武田の忠臣として生涯を費したる者なり

會津甲斐國戸川郡



十九

幸隆傳々
村山道長と

疑素

と
ふ

日本書紀卷之...

